

郷友会組織の機能と役割

—伊是名・伊平屋郷友会の事例—

石 原 昌 家

はじめに

郷友会に関する研究は、本年でちょうど十年経過した。聴き取りした資料は、膨大な量にのぼっている。だが、これまでその資料の山を突き崩せないで、『調査ノート』程度を断片的に発表してきたに過ぎない。

その最初の発表は、『どっこいムラは生きている—擬似共同体社会としての郷友会組織—』（『青い海』1979年、80号 青い海出版社 本稿に補筆して1980年3月沖縄国際大学文学部紀要社会学科編に研究ノート『擬似共同体社会としての郷友会組織』として発表）である。以下次の順に発表している。

『郷友会組織に対する学問的関心』（『みやこ』在沖宮古郷友連合会発足50年記念誌 1980年8月）

『〃ムラは生きている〃』（『郷友会』琉球新報社 1980年11月 琉球新報紙から再録）

『我がふるさとと基地の中一字宜野湾郷友会のこと—』（『青い海』1982年、118号 青い海出版社）

『字宜野湾郷友会』（仮題・『字宜野湾史』近刊 『青い海』1982年、118号所収原稿に加筆）

『郷友会（＝新勢会）活動と母村（＝勢理客）』（『高齢化の現状と将来展望』所収総合研究開発機構 昭和60年2月）

以上のようにこれまでの調査のごく一部分を断片的に発表してきた。

そこで調査研究を手掛けて十年という節目にあたり、本稿を期して郷友会・県人会の研究に関する資料を、引き続き調査と平行しながら本格的に整理して、発表していきたい。

この研究に関する目的と意義・内容などについては、各種研究助成を受けるために申請したとき次のように述べている。

「〔研究目的〕沖縄の都市地域における政治的、経済的活動には政党や企業の組織以外に郷友会組織が大きな影響を及ぼしている。それで郷友会組織の形態と機能・役割などを分析的に明らかにしていけば、沖縄の社会構造の一断面が認識でき、その特殊性を解明していくことが可能となろう。さらに、本研究を通して、日本本土、海外移民地における沖縄出身者の郷友会組織活動を調査研究していく端緒にする計画である。

なお、本研究は沖縄の村落共同体社会の研究にも欠かせない分野であるとともに、沖縄人の思考・行動様式の研究をも目的としている。以上の構想のもとに本研究を持続させるつもりで

いる。

〔テーマの所在〕村落社会では農業危機によって人口流出が相次ぎ、過疎化が進行して村落社会は崩壊の危機にさらされ、消滅したムラさえ出てきた。それは数百年の伝統文化・行事の危機ないし消滅を意味するかにみえた。ところが、逆に過密化した都市地域に消滅ないしは崩壊過程にあるムラが、その出身者で構成する郷友会組織として『擬似共同体』的に存在しているのである。そしてムラの伝統文化・芸能の維持・継承に努めている。しかも、ゲゼルシャフトとしての都市社会の中にゲマインシャフト、即ち共同体的結合関係を持ち込んで『われらの社会』を築いて政治的、経済的活動をしているのを研究するところにこのテーマの特異性が存在している。

〔研究の内容〕本調査研究の主要な内容は

1. 組織形成の動機・経緯
2. 組織維持の方法
3. 組織活動の具体的内容を把握することによって伝統文化の継承・相互扶助・各種選挙における投票行動・共同体の人間関係の結合度の調査
4. 模合の実態と生業活動における相互依存関係
5. 一世と二世との間の郷友意識の断層
6. 郷友会組織のもとにあるインフォーマルな組織とその活動内容
7. 母村との相互関係

（1978年度の研究計画書より）」

すなわち、沖縄の都市地域には、郷友会組織とさらにその中の小集団が重層的に形成されており、その集団の文化・政治・経済的諸活動の実態を把握して多面的に分析することによって沖縄の社会構造の特殊性、県民性研究の一環にすることを考えた。

このような問題意識で実際に調査研究をすることによって、郷友会について次のように規定していった。

「多くの場合、新しい職業を求めて農山漁村の集落から都市地域に離村してきた人たちからなるが、開拓移住者（国内移住や海外移住）のように、必ずしも都市地域に移住するとは限らない。例外的には、沖縄本島で集落が丸ごと米軍基地として土地接収されたため、他地域に移住せざるを得なかった人たちが、郷友会を組織している場合もある。また、激しい人口流入地域のなかには、いわゆる旧部落の人たちが、郷友会の名称で組織を結成している状況も現れている。」

さて、実際に調査研究に着手した時、その調査方法を若干改めざるを得なくなった。当初、郷友会・県人会組織そのものを研究するといった視点を持っていた。だが、個々人の生活史の中で、郷友会・県人会の組織が結成されていく、ないしはそれが必要とされるに至った動的過程としてその組織を把握していくことにした。したがって、その調査研究は必然的に出稼ぎ・移民の研究の中に位置づけられることにもなった。それで、今後の研究報告については、郷友会・県人会組織を個々人の生活史の枠組の中で捉えていくことになる。

ところで、本稿では伊是名・伊平屋郷友会の事例を通して郷友会組織の機能と役割について記述していくことにしているが、紙幅の関係上、伊是名村の字勢理客・諸見の郷友会と伊平屋村の字前泊・我喜屋の郷友会に限定して、その活動の実態を捉えていきたい。しかも、活動の内容も伝統芸能の継承と選挙運動時の郷友会会員の行動にほぼ限定しておく。したがって、この伊是名・伊平屋の郷友会の総合的分析は、別稿で記述することになっている。

1 伝統芸能の継承

組踊の復活

伊是名村字勢理客の出身者で結成している郷友会は、「新勢会」という名称を用いている。その名称は、1958年頃に異郷の地に「新しい勢理客をつくる」という意気込みで、新勢会と名付けた。この新勢会が、字勢理客に伝わっていたが絶えて久しかった組踊「忠臣護佐丸」を、1974年9月におよそ20年振りに浦添市で復活した。

また、1983年9月、伊平屋村我喜屋郷友会（1956年結成）がやはり字我喜屋に伝わっていた組踊「忠臣護佐丸」を、およそ30年振りに浦添市で復活した。

いったい母村において消滅したかに見えた伝統芸能を、何十年もたって異郷の地でその出身者が復活させるといった現象は何に起因しているのであろうか。その実態を知ることは郷友会活動の特徴を捉えることにもなろう。

1) 組踊復活の過程—新勢会（＝勢理客郷友会）

まず新勢会における組踊上演の過程についてみていく。

名嘉正博会長時代に、シマ（部落）＝母村の文化を異郷の地である浦添市において再現しようという気運が沸き上がってきた。それには、シマ出身の名嘉喜正という沖縄音楽の師匠が、那覇・浦添で活動しているということにも刺激されていた。そこで、まず思い付いたのが、シマでは絶えてしまった組踊「忠臣護佐丸」の復活だった。人口流出のため、シマではもはや上演が出来なくなったが、那覇・浦添ではそれが可能であることに気づいたのである。そして、シマで組踊の上演を見聞きしてきた人を選抜して一年おきに上演することにした。

組踊復活のための特別基金をまず集めて、鎧・兜をはじめ衣装一式を揃えて、練習を開始した。その練習は、浦添の内間公民館を借りて行った。みんな仕事を持っているので、夜の限られた時間内での練習は大変きつかった。子役の小学生たちは、下校したら家の壁一面に書いて張ってある台詞を練習してから、遊びにいくといった毎日が3～4か月続いた。しかし、こども達はその台詞の意味を、理解できなかった。

また、合同練習のときは、仕事を持っている大人の揃うのが遅れがちで、翌日の授業に差し支えるということで、結局練習せずにひきあげる場合もあった。しかし、こども達は「親子の別れの情景など、難しい音楽の部分だがよくも厭きもせずに頑張った」と大人達を感心させ

た。また、練習中、郷友会員がよく差入れをして激励に駆けつけた。

〔文化高揚としての役割〕

この新勢会の組踊復活は、40代が中心になった。指導するのは先輩だが、見聞きしてきた自分たちの世代が復活の音頭をとろうということになった。

この伝統芸能の復活の過程は、各界各層の郷友会員の文化水準を引き上げる役割を果たしている。

玉城朝薫の組踊は、先島を含めた沖縄各地で上演されてきた。台詞は同じだが、抑揚の違いとか台詞に少し方言混じりになるといった特長が、それぞれの地域に見られるようであった。そこで、新勢会での復活は首里系の「正統」組踊で上演すべきか勢理客部落伝来のやり方で上演すべきかで指導者の間で議論百出して、大変もめた。練習中にもお互いが異なった指導をしたりするので、配役された者が困惑した。

結局、勢理客部落伝来の抑揚・台詞回しで上演しないことは、方言をなくせといっているのと同じだという意見が大勢を占めて、島で上演されたとおりに演じることで落ち着いた。このように、各人各様の思いを込めて文化論議が真剣に展開された。そのレベルの高さは、大按司役をやった儀間光男県議が「組踊は完全にミュージカルです。毎日練習しているとそう思う。地方(じかた)達と毎日練習していると台詞回しなど本当にミュージカルだと思うし、酔いしれる。玉城朝薫は立派な芸術家です。日本の能や歌舞伎にも非常に興味を持つようになり、組踊と比較しながら観るのが楽しみだ」と、組踊への熱情をかたっていることにも示されている。

また、棚原光雄さんは「私たちは、組踊を幼少のころから見聞きしているので非常に好きだが同年代(40代)の人は、それに興味を持っている人は少なくて、私たちが不思議がる」と言い、玉城朝薫生誕300年祭の組踊シンポジウムも興味を持って聴きにいき、感銘をうけたと述べている。

〔組踊上演の影響〕

この組踊の上演は、新勢会の年間行事では、一番大きな行事である敬老会(9月)の出し物として1974(昭和54)年に初めて披露された。

「実際の上演のとき、こども達が演じたらお父さん、お母さん、じいちゃんばあちゃんは感激してワァーワァー泣くし、会場は割れんばかりの大拍手だった。音楽が素晴らしかったら親子の別れの情景はお互い毎日稽古していても自分が主人公になってしまうので、じーんときて涙がでます。」(儀間光男氏談)

その感激の涙は、島に伝わる伝統芸能が異郷の地で20数年振りに復活したうえ、二世にも継承されていく様を目のあたりにしたからである。

上演にあたって、本劇に入る前に「イリファ」といって観客に配役を知らせるため、それぞれ配役の衣装を着けたままぐるぐると舞台を回って、観客にアピールして劇を盛り上げることを行う。この新勢会の組踊初演をきっかけにして、新勢会音頭ができた。それは、「イリファ」

のとき音楽がないのは寂しいから勢理客の音頭でも作ろうではないかと酒座での話がはずんで、沖縄音楽の師匠である名嘉喜正さんが「それでは私が作ろう」と言って、作詞・作曲した。歌詞には、故郷勢理客部落の様子が謳い上げられている。この新勢会音頭は、いまでは郷友会や母村においてもあらゆる行事の場でいつも流れている。郷友会の婦人部が振付を考えて、踊りもできあがっている。次に『勢理客節』全詞を紹介しておく。

シ ャ ク ブシ
勢 理 客 節

作詞作曲 / 名 嘉 喜 正

1974年10月

1. ^{ウフヤマ クサ} 大山や後て ^{バルメ} チマイ原前なち
^{シジ ウザ} 静か御座なしゆる村ぬ美らさ
^{タゲ ワシ} 互に忘るなよ我村勢理客や

(道は碁盤型、住居はすべて南向きの勢理客の後方には、村のバックボーンといわれている上の御嶽《大山》が大空にそびえ立ち、前方には、緑なす小高い丘「チマイ原」があり、実に、母の胸に抱かれたようなぬくもりさえ覚える静かな村、平和な村である。)

2. ^{アガリアマグレクイリ ヤ ナ ナバル} 東 天 城 西や屋之下原
^{ミグト ミカウ} ウーシディや美事村ぬ美顔
互に忘るなよ玉ぬウーシディ

(村の東方にある天城は、雨乞いの場所として知られ、また、村の西にあって、引き潮のあい間を利用して農作物の栽培をしていたヤナサ原。その、ヤナサ原の南の端に大海原に向かって、泰然自若として腰を据えているウーシディ《岩》、それは、村人の心であり村のシンボルである。)

3. ^{ジョーク} 重箱うさぎてトウティクに登て ^{ヌブ}
^{ニングウチ マチ} 二 月ぬ祭り親と共に
互に忘るなよ村ぬフトキヌ上

(ジョーク《重箱》を手に手に、父や祖父に連れられて、トウティク《フトキヌ上》に行き、いろいろ名御馳走にありつくのが最高のよろこびであった。また、このフトキヌ上は、若者達のモーアシビの場所としても大いに利用され、様々な思い出の残る場所である。)

4. ^{スル} クムライに集てやぐいうちたてる
^{キ ア} ヤマンチュミ馬ぬ戯上ぎ美らさ
互に忘るなよ村ぬクラヌムイ

(ヤマンチュミ《アブシバレ》の日には、村からかり出された何頭かの馬が、クラヌムイに群がる群衆の前をかけ声と共に一斉に走り出す。思わず群衆の歓声が、クラヌムイ一帯にひびきわたる。一位になった馬は馬上の若者と共に、しばらくは村の話題の中心ともなった。)

5. スナイ^タ誰^スが乗^ムゆが^ムテーイ誰^ムが持^ムちゆが
 ルクグ^{ツチ}ツチ^{チナ} 六 月^ムぬ綱^ムやガ^ムーイ^ムク^ムマ^ムシ

互に忘るなよ村ぬハナクモー

(旧暦の六月の綱引きには、村が二分され、西、東それぞれの班の若者や子供らが、ホラヤシチタンパーク《注・石油缶》を鳴らしながら家家をめぐり歩き、その年の収穫を祝い、来る年の豊作を念じながら大いに歌い踊る。これを「メーガイ」と称し、綱引きの前後に行われる。いよいよ当日になると、村中の者がハナクモーに集う。この日の最高の見ものはスナイである。二畳近くもある大板の上に、男子青年二人が乗りこみ、その板を大勢の人がひっかつぎ、「カルヤイ」、「ソーヤイ」のかけ声も勇ましく、うずまく群衆の中を西へ行ったり東へ行ったり大いに踊りまくる。これをスナイと称するのだが、やがて、「オッ」「オッ」という合図と共に西、東のスナイが一つに合わされ、四人の男子がその上で取っ組み合いとなる。それが終わるといよいよこの日最後の綱引きである。たまたま見物に来ていた他村の者が、綱に手でもふれていようものなら、テーイ《クバの葉のタイマツ》火をひつつけられる始末である。しかし、この日のでき事はすべてその日限りのことであって、誰もそれをとがめる者はない。)

6. ガ^{ミン}チ^ユス^ル 神 女^ムや集^ムてイ^ムリ^ムチャ^ムヨ^ムぬ祭^ムり
 デ^イグ^シチ^ヤ 梯^ム梧^ムぬ下^ムぬア^ムガ^ムリ^ムゴ^ムサ^ムに

互に忘るなよアガリゴーサン

(旧暦 8 月 18 日は、イリチャヨと称する神祭りで、村中の神女たちが、アガリゴーサン^ムの宮の前、梯梧の木陰に集い、歌ったり踊ったりする。これはちょうど天の岩戸から天照大神をさそい出す様にも似ているという。また、ムートヤーの女主たちは、「ユガフハミニゲー」と叫びながら、神女たちは勿論のこと見物人にも神酒をふるまい、祭りはこのあたりからいっそうにぎわいを呈する。)

7. ハ^ナグ^{ツチ}ト^ニチ^メガ^ニク^{スル} 八 月^ムぬ十二^ム日前^ム兼^ム久^ム集^ムて
 ア^レチ^ムウ^リ 踊^ムいはに遊^ムぶ心^ムぬ嬉^ムし^ムや

互に忘るなよ村ぬ前兼久

(翌 8 月 12 日は、前兼久広場に仮の芝居小屋が建てられ、村人は酒肴を持参して、若者の演ずる村芝居で一日を過ごす。)

8. イ^ンジ^チ森^ム登^ムてテ^ムィ^ムラ^ムシ^ム火^ムよ灯^ムむ^ムち
 ミ^{ユク} 見^ム送^ムいゆ^ムさし^ムん昔^ム事^ムい

互に忘るなよ村ぬインジチ森

(経済的に恵まれなかった当時は、勢理客でも若者のほとんどがイチマンウイ《注・糸満売り》、ズリウイ《注・辻遊廓売り》を余儀なくされ、かろうじてそれを免れた者は、本土へ出稼ぎに。それはほとんどが紡績工場行きの女性であった。那覇港を出た船が村の西海上を通る頃は、日もたっぷり暮れていた。親戚縁者の者たちが、ンヂチムイにともすティラシ火を、船の上から一目見た若者たちは、思わず胸が熱くなり、止めどもなく流れる涙に二度とティラシ

火を見ることができなかったという。)

9. ユンザカラカラが鳴^ナち^{ウムカジ}ゆる思影に
一 雫^{ヒトシヅク}ぬらす旅ぬ枕

互に忘るなよ我村勢理客や

(古里を遠くはなれ、朝な夕な思うことは、肉親のことであり、あの山この川、あの友この友のことである。村の真中を北から南へ連なる田んぼ《ユンジャ原》の夜通し鳴きつづる数々の虫の声《ユンジャカラカラ》は、古里を出てから幾年かたった今もなお、この耳にささやいている。時には、親兄弟のやさしく語りかける声のように。また時には、遊びたわむれる友の声のように。)

(名嘉喜正『ふるさとの歌』ゴモンレコードより)

さて、母村と郷友会の協力によって、20 数年も埋没していた 伝統芸能が 復活するや 母村の方でも是非上演して欲しいという声が澎湃として湧きあがった。

そこで、早速母村でも上演することにした。島の衣装はもう古ぼけて使用できないことがわかり、郷友会のほうで組踊復活のために特別基金を集めたその金で、衣装一式を購入して母村に寄付することにした。そして地方(じかた)・配役・役員全員と名嘉音楽グループなど約 20 名は、それぞれ休暇をとって手弁当で島に渡った。

かくて、母村においても消滅していた伝統芸能が、20 数年振りに復活したのである。

2) 組踊復活の過程—伊平屋村我喜屋郷友会

我喜屋部落の組踊は、勢理客のそれとは衣装は似ているが、題目がちょっと異なるという。我喜屋郷友会の組踊復活は、新勢会における復活とは全く関係なく実現した。

1983 年の正月に祝の酒座で島で組踊の上演を体験してきた面々と 郷友会青年部の 金城憲浩さんらが、談笑している内に「組踊の護佐丸を演じたい」という声があがった。それで、金城さんは「私らが協力したら、みなさんやりますか」と言い、その話が発展して、瓢箪から駒が出た。そこで母村のその道の大家も協力するのであれば、是非上演しようということで話が進んだ。

しかし、毎月の郷友会役員の会合である模合の席上では、これは大変な事業だから、もっと慎重に考えないといけないということになり、その話は宙に浮いた。だが3月の会合のとき、やはり上演しようと役員の意志は確認されたが、先輩たちの意志を再確認しようということになり、その決意を知った。そこで母村のほうにも問い合わせして協力の意志を確認して、郷友会は計画を実行に移すことを決断した。

実際に練習を始めるとなると資金が必要だったが、郷友会にはその金が無く、婦人部の個人的積み立て金が 20 万円あったので、それを借りることにした。そして 下準備の後、同年 5 月 27 日に「むすび」＝結団式が行われた。そして、配役を経験者たちがそれぞれ検討して決めた。

以後 9 月まで、22 名の役者と端踊を入れると総勢 35 名ほどが連日練習することになった。

毎日曜日は、朝から練習した。上演 10 日前からは、連日連夜猛練習だった。全員仕事を持っているかたわらだから、おおごとだった。練習会場の確保がまず大きな仕事だった。各地の公民館や体育館、浦添市民会館などを借りた。使用料が 1 回につき 2 千円もするので、上演基金づくりもすぐに着手しなければならなかった。それは、プログラムに広告を掲載することにして、広告料を集めることにした。上演までには、164 万円かかったが、広告料は 98 万円集まり、当日の寄付金を合わせると 190 万円程集まった。

我喜屋部落でこの組踊が跡絶えて 30 年程たつので、衣装や小道具類を全部揃えなければならなかった。幕だけでも 50 万円もするので、材料だけ購入して 2〜3 日ばかりで青年たちが手づくりで準備した。小道具類は大工を雇って作らせたりした。

しかしなんといっても練習そのものを積み重ねていくことに、膨大なエネルギーを割かれることになった。

「みんなが揃わないと練習は出来ないし、今日は一人欠けたと思うとまた次の日は誰かが休むという具合になったりするので、先輩はそれで怒り出すし、人員集めに苦労した。島で何かやる時スピーカーで呼び掛けてみんなを集めることが出来るが、ここでは浦添・那覇・豊見城にまたがって住んでいるので、みんなを揃えるのが大変だった。特に先輩たちは青年部が順番を決めて、自宅まで送迎することになっていた。だが、配役のひとが休んだりするので、先輩はもうやらんと言い出すし、先輩そんなことを言わないで下さいと頼んでなんとか宥めた。ところが、期待されて一番台詞の多い青年は、上からあれこれ物凄く言われて烈火の如く怒り出し、もう止めたと言いだした。今度は私は、青年も宥めたり、先輩に対してはそれぞれ自分の仕事が優先だけど、かれは責任を持って役をこなすと言っているのだから、そのように言わないで下さいとたしなめて上・下の加減をうまく取っていくのに苦労した。そのうえ、私は寄付金集めのために、職場回りするとき自分の仕事を 4 日間も休んだ。仕事から帰ってくると、汗を流して、食事する時間も惜しんで練習に行くので、その間家庭を省みないから妻からは怒られるし、家では肩身の狭い思いをした。」（金城 憲浩氏談）

〔協力体制〕

郷友会の役員会には、婦人部の正・副部長も常に出席しているので、練習会場には婦人部から 3 人 1 組の交替で、炊き出し役も付けることを決め、毎回炊き出しをして練習を激励していった。それは村祭り準備の雰囲気そのものであった。

小道具のうち那覇では入手できない蓑笠は、母村のほうに上演 1 か月前にその制作を依頼した。もはや、伊平屋でもそれは入手できないので、わざわざ山へは行って材料を取ってきて制作した特注品であった。それもわずかの謝礼で済ませた。

演技指導者の第一人者が、伊平屋村に住んでいるので、海を渡って二度も浦添市まで足を運んで貰った。郷友会の青年部から手のあいている者が、片道 2 時間以上もかかる本部町の港まで送迎した。当人は、沖縄本島在住のこども達のところに、二回の来島で一週間は滞在することになった。しかも、旅費も受け取らなかった。以上のようないろいろなひと達の協力体制が

形成されて、初の上演にこぎつけた。

〔組踊復活のとき〕

出演者は、男女によって構成され、22歳から63歳までの年齢層だった。この組踊復活は、母村でも話題になり8月に上演されたとき、伊平屋村長を始め議会の我喜屋出身の全議員も駆けつけた。さらに、我喜屋部落から30名ほどが遙々海を渡ってきた。

郷友会・青年部の若者たちが出演しているので、その両親・祖父母が誇りに思い、必ず見物に行くと言って駆けつけてきたのである。会場には、150名ほどの観衆が詰めかけて、上演は大成功だった。

試行錯誤をしつつも練習の過程で、この20代から60代の世代がともに30年ほども跡絶えていた伝統文化掘起こしの共同作業を行うことによって、世代間の断絶を埋めることにもなったのである。

翌年の我喜屋部落の8月豊年祭には、郷友会長と青年部長の二人が組踊復活に協力した母村へのお礼として、3日程費やして見物に行った。それも「手弁当」で行くのである。

新勢会の場合は、隔年ごとに上演してきた。だが、我喜屋郷友会では、上演までに相当なエネルギーを消耗してしまったので、今後犠牲的精神を持ったひとが現れない限り、再演する決断はつかないのではないかと危惧されている。

2 郷友会と選挙

1) 選挙運動に対するたてまえ

各種選挙のたびに新聞紙上に「郷友会票の動き」とか、「郷友会票の行方は」と言った表現が使われるようになったのは、1970年代の後半あたりからである。

それは、沖縄の各種選挙で政党とは別に郷友会が隠然たる影響力を持っていることを示しているかのように見える。各種選挙の時、郷友会員がどのような対応をするのかということを知ることは、郷友会の機能と役割を研究する上で有効である。

そのために郷友会員の票をバックにした候補者の立候補に至る過程と選挙運動の実態を捉えていきたい。

ところで、選挙と郷友会の関係を見ていく場合にまず認識して置かななくてはいけないことがある。それは、郷友会組織そのものは、絶対に政治活動をしなないということを鉄則にしているということである。その組織の目的は、親睦を図るのが第一義なので、思想・信条を異にしている会員を網羅した組織にあって、政治活動を行った場合、組織そのものが瓦解する恐れがあるし、実際郷友会組織そのものが選挙運動したために、その組織が崩壊した例もあった。それでは、前述の選挙における「郷友会票」という表現は何を意味しているのかという

ことになる。それは、郷友会組織そのものは、政治活動・選挙運動をしてはいけないが、個々の郷友会員が政治活動・選挙運動をするのは当然自由である。したがって、郷友会の会員が各種選挙に立候補したら、その組織としてはバックアップはしないが、会員がその後援組織を作って選挙運動することは自由である。つまり、郷友会組織は、建前として選挙運動をしないことになっているが、実質的には形を変えて選挙運動を行っている場合が多い。だから、郷友会は、政治活動をしなと断言していても、新聞紙上で「郷友会票」という表現を使われることに対してだれも異論を唱えないのである。つまり、思想・信条を異にしている会員相互間に矛盾を生じさせないように建前と実質を使い分けて、郷友会員は、選挙運動を行うのが常である。具体的には、郷友会員の結成している選挙運動組織の役員には、郷友会の役員は名を連ねないようにして、郷友会組織は選挙運動によって生じる軋轢を事前に避ける組織防衛を行っている。

2) 立候補の過程－伊是名の郷友会員－

現在(1984年12月)伊是名村出身の市町村・県議会議員は、浦添市議会に一人、県議会に二人いる。県会議員の一人は、元浦添市会議員から立候補して当選した儀間光男議員である。浦添で伊是名出身者として、初めて立候補して当選した儀間議員の立候補の過程と郷友会会員の選挙運動の実態からまず見ていく。

〔立候補者選出の経過〕

沖縄県人の出稼ぎ・移民者に共通することだが、おおかた身内・親類・友人・知人などのひきで離村してきた人たちは、職業も同じ職種の上、居住地も同じ地域に集中する傾向がある。沖縄県内における郷友会員の場合も、まったく同様な傾向が見られる。

伊是名・伊平屋出身者の多くは、浦添市に集中しており、しかも字内間とその周辺に居住している。(具体的一例として、伊是名村字勢理客、伊平屋村字島尻出身者の居住地域を図示しよう。〈27頁に図示〉)

浦添市で伊是名出身者が立候補するに至る経過には、当然浦添における伊是名出身者の有権者の増加が、その前提になっている。1969年3月に執行された浦添市議会議員の最下位当選者の得票が404票だったので、伊是名各字単位の郷友会員の有権者数を数えれば、議会に自分たちの出身者を送り出せる判断は十分できた。

伊是名出身者は、オキコ製菓を始め経済界ではだいぶ頑張っているの、そろそろ政界の方でもその存在を示そうという雰囲気次第に醸成されてきた。つまり、「異郷の地」におけるアイデンティティの確立を示す動きである。

伊是名村出身者は、浦添市に諸見・内花郷友会、仲田郷友会、伊是名郷友会、新勢会(＝勢理客郷友会)を結成していた。それは、これら郷友会員の中の有力者の間でまず話題となっていく。その際、会員の多い郷友会の中から候補者を出そうという話になった。郷友会選出議員とも言っても過言ではないこの候補者選びは、極めて微妙な問題であり、いろいろな要素が入

ってくる。

各政党からの立候補者の場合は、その出身地域の郷友会員の協力を得ることになる。また、郷友会員が郷友会サイドからではなく、居住地域などから立候補を要請された場合も、その出身地域の郷友会員がその人を推すということになる。

それ以外の前述の場合、母村においても自分たちの部落から議員（ないしは首長）を送り出そうとするし、また各部落間に対抗意識が存在するのも、どこの集落にも見られる常態的姿である。例えば、その部落対抗意識は、村の運動会の時などに顕在化する。それは伊是名全体の郷友会の運動会を実施した時、まさに母村における競争意識が現れて、資格問題でひと悶着がおり、それっきり止めてしまって、いま村全体の郷友会の運動会は中断したままである。

このように郷友会によっては、母村における各部落間の微妙な雰囲気や都市のなかに持ち込んでいるところも多い。したがって、各議会選挙における立候補者の選定の場合、そのような背景も認識しておかないといけない。

儀間議員が最初立候補するまでの経緯としては、浦添に諸見出身者が多いのでまずは諸見出身者から立候補させようという話が進み、具体的名前も内輪では出ていた。しかし、現在の沖縄県知事西銘順治の下で以前書生となって政治家を志望していた勢理客出身の儀間光男氏との間で調整が出来て、かれが立候補することになった。

かれは、当時弱冠29歳、沖縄の最大手メーカー・オキコ製菓の管理職に就いていた。

〔選挙運動の実態〕

候補者選定の過程は、いわば郷友会員の有力者間の根回し期間ともいえる。そして、その候補者の後援会の結成大会が開かれ、事実上の旗上げとなり、選挙事務所の設置となる。

儀間候補の選挙事務所は、内間（浦添市）に設置された。たまたま当初、立候補を要請されていた諸見出身の人が、伊是名島で事業をすることになり、一家が島に引き揚げていたので、空き家になった住宅があった。その人が、選挙が終わるまでの3～4か月もの間家賃を取らずに無料でその住宅を選挙事務所に提供した。

伊是名島出身の経済界の有力者たちが、音頭をとって選挙資金の寄付集めに奔走した。選挙事務所が設置されると、運動員がそこへ詰めるので、運動員のための炊き出しが必要になってくる。特に告示に入ると郷友会員の運動員が常時 100～120 名ほどが事務所に詰めた。そこで、母村からも差入として野菜・豚肉・魚などをどんどん送ってきた。それが切れそうになると、また送ってくるというように、選挙が終わるまで切らさないということである。母村だけでなく、郷友会員も差入を持ってきた。そして儀間候補は結局新人ながら、832票で3位当選を果たした。1973年3月4日執行の浦添市議会選挙は、定数 27 人・候補者 37 人で投票者数 22,039 票だから、儀間候補は 3.8% の得票率だった。最下位は 463 票だったから、単純計算であと 94 票で二人当選することになる。事実、次回二人立候補することになった。

「みんなが、なにか直接見返りがあるわけではないのに、完全にフィーバーしてお祭みたいになった」選挙運動は、ピラ張りなどを始めみんな手弁当で郷友会員がやるので、選挙費用は

他の候補者の約三分の一から四分の一程度の費用だった。必要経費は、全部寄付で賄われ、本人は全然負担しなかったという。

3) 伊平屋の郷友会と選挙

〔共産党公認候補の出現〕

伊是名島と伊平屋島は、1939（昭和14）年に分村した兄弟島であり、姻戚関係のあるひと達が、それぞれの島に住んでいる。したがって、伊是名島出身者が各種選挙に立候補すれば、当然の如くわがことのように選挙運動をしてきた。

しかしながら、那覇でも浦添でも伊平屋郷友会員は、常に伊是名郷友会員に協力する形に終始してきたので、特に那覇市議会で伊平屋郷友会員にバトンタッチするようにという声が青年層を中心に高まってきた。また、母村の振興開発を推進するため伊平屋空港建設計画の実現を目指すためにも、伊平屋出身の議員を都市地域に送り出す必要があると痛切に感じていた有志たちが、ことあるごとに周囲で政界に人材を送ろうと呼び掛けていた。そこで、1981（昭和56）年7月の那覇市議会選挙には、これまでの伊是名出身の山川正平議員のあとを伊平屋出身の安里安明さんが継ぐよう話し合いが進められてきた。だが、あと一期伊是名出身の方から議員を送りたいということになり、安里さんは出馬を見送ることになり、伊平屋郷友会員は不満を募らせていた。

ちょうどその折、1981年3月の浦添市議会議員選挙に日本共産党公認で伊平屋出身の西銘勉さんが立候補することになった。前回の浦添市議会議員選挙では、共産党公認候補が一人出馬して、799票（得票率2.7%）を獲得して12位で当選していた。（定数30人、候補者46人）。最下位は531票だった。

前回（1977年）の選挙の時、伊是名出身の儀間光男候補（西銘派）と大城永一郎候補（国場派）の二人が当選を果たしていたが、儀間議員が、任期を残して1980年6月8日執行の第3回県議会議員選挙で、浦添市選挙区から立候補して一位当選したので、転出していた。

したがって、1981年3月の浦添市議会議員選挙は、伊平屋郷友会員にとって、今度は自分たちの島出身者を是非出馬させたいという状況が生まれ、具体的名前も会員の有力者の間で、浮き沈みしていた。共産党公認で伊平屋出身者が立候補する話が、具体的に出てきたのは、まさにその時だったのである。

しかも、儀間議員の後継者として伊是名出身の新人があらたに立候補することになり、現議員の大城永一郎さんも当然立候補するわけだから、安全圏である伊是名・伊平屋各一人ずつ立候補する理想的形はなくなった。ここで問題は、伊平屋郷友会員にとって、政党とは無関係に自分達の中から、立候補させるか、それとも政党公認候補に協力していくかの判断が迫られることになった。

一般に郷友会選出の議員は、保守系無所属が多い。しかし、革新政党から立候補する場合でも、「おらがムラの出身」ということで、郷友会員は選挙応援することが一般的傾向である。

とはいえ「革命政党的の共産党候補の場合となると、そうはいかない」というのが、どこの郷友会員の中でも聞かれるおおかたの見解であった。

ところが、伊平屋郷友会員は、伊是名郷友会員に対してこの選挙の問題では不信の念を強く持っていたので、共産党公認であろうが「おらがムラの出身」ということで、選挙応援することにした。しかも、共産党の基礎票があるので、伊是名・伊平屋出身が3人立候補することになって、伊平屋出身の候補者の当選の確率が高いと情勢判断できた。

〔共産党公認候補に対する選挙応援〕

日本共産党公認の西銘勉候補は、伊平屋村我喜屋出身である。伊平屋村では、我喜屋と田名が村長を出せる有力な部落である。また、郷友会員の政党支持の状況は、母村における状況とはほぼ一致する。1980年6月22日執行の第36回衆議院議員選挙で、伊平屋村における得票結果をみると、自民党の3人の候補者（国場幸昌・小渡三郎・大城真順）の合計得票が539票で70.6%の得票率である。それに対して共産党の瀬長亀次郎候補は126票で16.5%の得票率しかない。いかに保守王国であるかは、これで明らかである。

母村における政党支持の状況は、以上のように圧倒的に自民党支持が多いにも関わらず、伊平屋出身者は、浦添市議会議員選挙で共産党公認候補に全力をあげて、選挙応援をすることになった。

西銘候補は、伊是名中学を卒業後、名護高校を経て本土大学に進学した。その後も本土で生活して1979年に沖縄へ戻ってきたので、この間伊平屋のひとたちとは没交渉だった。しかし、那覇市から浦添の内間に引越ししてきたので党公認で浦添市議会議員に立候補することになったのである。したがって、親戚のひとに立候補の意向を伝えるや「地盤も知名度もないのに、とんでもない」と忠告された。しかし、党の指示だから当選の可能性はなくても立候補する意志を示したので、それでは協力するという事になった。

浦添の我喜屋郷友会員は、36所帯しかなかったが、西銘候補はまずその有力者5名を集め、出馬の意向を示して、協力を要請した。かれの身内も共産党公認候補ということに、最初は反対だった。周囲は、立候補するなら無所属で出ることを強く勧めた。

しかし、そういうわけにはいかないということが分かると、これまで自民党議員の選挙運動を一所懸命やってきた親戚の人も「同じ島人（しまんちゅ）だから、党派には関係ない」ということで、応援を約束した。

伊平屋・伊是名西銘後援会が結成されたが、その後援会長には党関係者、副会長にはこれまで自民党候補を応援してきた党とは無関係のひとがついた。つまり、党と郷友会関係の二本建で選挙運動を進めることになった。その特徴は、後援会結成大会で早くも示された。

後援会結成総会は、那覇・浦添在住の伊平屋・伊是名出身者に呼び掛けて、内間公民館で約100人ほどの支持者を集めて開かれた。

党と無関係の後援会副会長が、開会の挨拶をしたが、そのあとは共産党関係者の話が続いた。そこで副会長が、閉会の挨拶をすることになったとき、「これまでは、共産党の話だった

が、党派をこえて協力しましょう。これまで伊平屋から議員が出ていないので、後輩を育てる意味でも党派をこえて、みなさんご協力下さい」と挨拶した。「そう言ったもんだから、拍手喝采を浴びた。ある婦人は、あんたが最後にあのように締め括ったから、みんなのこころに響いたよと語った。田舎では、いまでも共産党と言ったら元々怖いもんだというデマから、まだ抜け切れない面が残っている」と語っている。

しかしながら、いざ選挙運動が始まると、文字通り党派をこえて運動は広がった。

その選挙運動の形態は、これまで本土においてしか選挙運動を体験したことのない当の西銘候補自身あっけにとられる展開を見せた。

「選挙事務所の建設に当たって、ブルドーザーを持って来て土を入れてそこを固める土地の整地やプレハブの材料を持って来てそれを建てるとか、それをやるほとんどが郷友会員のみなさんで、共産党関係者はその3割でいどの人数である。郷友会員のみなさんが集まり、ブルドーザーを持って来るひと、砂を運ぶひとなどそれぞれの分担が決まり、自分の仕事を休んでそれに取り掛かる。

本土では、大衆がトラックはぼくだ、ブルは誰だと直ぐ決まっていくことはない。本土ではそのような事柄は、党員という身内でしかやらない。郷友会員のようにおまえは何を持って来い、おまえは仕事を休めと大衆同士で決めるということは、本土では絶対に聞かない。宣伝カーの運転も郷友のみなさんが、交替で務めた。しかも物質的な面は100%カンパである。郷友会員の保守・革新を問わずカンパを選挙事務所に届けた。出身部落の我喜屋郷友会員の場合、那覇・浦添在住のひとは全員とっていいほどカンパした。それ以外は、繋がりのあるひとがした。

選挙運動に付き物のビラ張りやビラ配りなどには、伊平屋の郷友会員の青年たちを中心に行われた。青年たちは、仕事を終えると直ぐ選挙事務所に直行して、夜遅くまで自主的にを手伝った。その作業も、仕事を休んでも手伝うといった熱の入れかただった。特に親戚の事業主は、このような運動員を物心両面で激励していった。」

〔地域を越えた選挙運動の広がり〕

沖縄の選挙は、その選挙区だけの選挙運動を見ていては、その全体状況を掴めない。郷友会選出の候補者の場合、母村のひとたちや他の地域の郷友会員が如何に支持して、選挙応援をするかにその運動の一層の盛り上がりはかかっている。

伊平屋出身初の選挙ということで、その選挙運動の盛り上がりは、那覇在住の郷友会員の保守のひとたちも看過できなくなった。それを後援会長は次のように述懐している。

「伊是名・伊平屋郷友会員の票の奪い合いになる伊是名出身の二人が立候補しているので、伊平屋出身の議員を出して伊平屋空港設置運動を進めたいひとたちは、これで伊是名に対して不満を持った。その反感も手伝ってか、選挙運動の盛り上がりの中で、伊平屋の郷友会員の保守系のひとたちも、多額のカンパをどんどんしてくれたし、那覇からも保守系の有力者が激励に駆けつけてくれた。選挙事務所には、運動員の炊き出しのために野菜とかいろいろ物が寄せら

れた。最後には、伊平屋村の保守村長までも共産党候補の激励に見えた。

私の知る限り、共産党員の選挙として西銘候補の選挙の時ほど、大衆的な盛り上がりというものはないのではないと思う。私の妻も、那覇から仕事の合間に選挙事務所に炊き出しの手伝いにいく時は、伊平屋から送って貰った黒砂糖で砂糖てんぶらをたくさん作って持って行くのが常だった。

伊平屋の場合、村ぐるみ保守とっていいほどだが、西銘候補の父親が島で校長も永年勤めて、信用絶大だった。だから、西銘候補については、名前は知っているが顔は知らないというひとが大半だった。だが、西銘校長の長男だよという校長には世話になったからそれでは支持しようということになった。」

その点、西銘候補者自身も次のエピソードを語っている。

「私自身は、運動員が私の親戚なのか否かも知らない場合が多かった。だから、道で出会ったひとが、知らん振りしてと怒って声をかけるひとがいるが、実際その人の顔を知らない場合が多かった。するとその人の奥さんが、勉は永いこと本土に住んでいたのだからしかたがないよとなだめるのであった。父が島で38年も教員生活して来た関係で、私を応援してくれているひとが多かった。」

「一期目は最初だから支援するが、あとは自分でやらんと知らんよという言いかたもあるが、とにかく物心両面の支援は大変なものである。（郷友会員の）選挙のやりかたは政策で訴えるということではなく、親戚のつながり、誰それにお世話になったとか、私の父に媒酌人になって貰ったとか、政策抜きの話がどんどん伝わっていき、カンパは事務所に自主的に持ってきてくれた。」

もちろん、それは郷友会員サイドの方からみた、支持形態であって、共産党サイドからみたそれについてはあとでみていく。

どの地域の郷友会員も、全体として保守的傾向が強い。伊平屋の郷友会員の場合もその例に洩れないことは、その母村における政党支持の状況をすでにみた通りである。したがって、それは選挙運動の仕方でも内部対立となって現れた。

後援会の副会長は伊平屋と伊是名各一人ずつおいていた。伊平屋の方の副会長は、党とは無関係だったので「選挙期間中、私と党は衝突もした。あんたがたは共産党として、このようなやりかたで選挙運動をしているが、いままでの伊平屋の選挙はそうではないから、伊平屋の青年たちと私が思うように選挙運動を進めるから私に任せてくれと言った」と言う。つまり、「勝手連」的選挙運動とも言えた。党は党のやりかたで公認候補をおしたてていくが、伊是名は伊是名のやり方で、伊是名出身の副会長がまとめていく。伊平屋は伊平屋のやり方で応援していくことになった。

〔共産党独自の運動〕

共産党としての西銘候補の独自の政治活動は、次のような内容だったという。

「浦添市選挙区の共産党独自の県議会議員候補は、2,277票（得票率8.3%—1976年6月執行第2

回県議会議員選挙結果)だった。共産党の衆議院議員瀬長亀次郎は、4,979票(得票率15.3% - 1980年6月執行第36回衆議院議員総選挙)であった。どれを共産党の基礎票と考えるかとなると、県議会議員選挙の結果を一応の目安とした。赤旗読者も僅かだし、2,400~500票だと大体の見当をつけていた。それで地元の安波茶出身の共産党公認比嘉政敏候補と区域分けして、選挙戦に臨んだ。

私は浦添に引越して間もなかったので、地域のことをじっくりやる期間はなかった。だが期間がないなりに、半年間で地域のことを物凄くやった。まず、アンケート調査で地域住民の諸要求を汲みあげていった。日本共産党浦添支部西銘勉の名前で、党員が調査員となって調査票を配布・回収し、集計をするとその結果を住民にも知らせ、その要望を共産党県議と県の土木部に掛け合い、県の部長はこう返事したと伝えて、実現を図っていった。また、内間区で5年間も側溝の蓋をして欲しいと陳情してきたが、実現をみなかったが、私が市役所の方へ陳情したら2日で実現したので、私に解決を依頼したひとは党とは無関係の地域住民だったが、私のために10数票を読んできてくれた。瀬長衆議院議員を伴って人口急増地帯で郵便局・郵便ポスト・屋根付バス停を作る交渉を関係当局と交渉したりした。陳情に行くときは郷友のひとで党の支持者でもある地域住民をつれていった。このように短期間でいくつかの地域住民の要望を実現させて行った。

郷友のこれまでの選挙では、政策を訴えるという選挙運動を経験していないので、政策を訴えて支持を拡大しようとする共産党の選挙運動を知って、こんな選挙は初めてだと郷友のひとたちは驚いていた。そして共産党機関紙の赤旗読者も増えた。しかし、それは義理で読者になっている面もあるかも知れない。しかし、雰囲気が変わったことは確かである。」

4) 選挙結果とその波及 = 伊平屋出身の那覇市議会議員選挙への出馬

このように、諸条件が重なったために共産党と郷友会員が足並を揃え、「村ぐるみ・郷友会ぐるみ」といってもよい熱狂的選挙運動は、浦添市民を驚嘆させる結果となって現れた。この浦添市民となって僅か数か月の共産党公認の新人候補が、トップ当選を果たしたのである。31歳の新人候補の得票は、1,089票(得票率3.1% - 定数30人候補者46人)で2位に41票の差をつけていた。現職の共産党公認候補も938票(得票率2.7% 第12位 前回も得票数799票で得票率2.7%第12位)を、集票していた。

伊是名出身の二人の候補者の結果は、大城永一郎候補(自民党国場派)が821票(得票率2.3%第23位 前回は得票数638票で得票率2.2% 第24位)、伊礼正二候補(保守系無所属西銘派)は、703票(得票率2% 第33位)で僅か32票差で落選となった。数字の上では、伊平屋・伊是名出身の3人の立候補者が、全員当選を果たせる結果が示された。あとで見るように同じ郷友のものが複数で立候補したら、郷友会員はその票を分割していくのではなく、郷友会員の間で票の奪い合いといった形になる。したがって、全員当選といった計算は、あくまでも数字の上の話である。

この伊平屋出身のトップ当選は、伊平屋郷友会員の意気をおおいに盛り上げ、大きな自信を与えた。

この勢いが、4か月後（1981年7月19日執行）の那覇市議会議員選挙には、伊是名出身議員（山川正平）から伊平屋出身へバトンタッチさせる大きな契機となった。

まもなく、それぞれの郷友会員の有力者同士で、話合いが行われ、那覇市議を3期勤めた山川正平議員が、立候補を見合わせて、伊平屋村前泊出身の安里安明さんへ引き継ぐことになった。

山川元議員は、1965年7月執行の選挙で初当選した。居住地域住民と伊是名・伊平屋郷友会員がその支持母体であった。政治家を志望していたわけでもないが、PTAの役員などをして信望が厚かったので地域住民から推されたのが、そもそもの立候補の動機であった。

一期目の選挙結果は、初陣ながら2,543票（得票率2.4% 第15位 定数30人 候補者51人）の好成績だった。

その次の1969年の選挙の時は、郷友会員の有権者数は前回よりも増加していることに安心して、他の候補者の選挙応援する余裕を示すほど油断したために、1,627票（得票率1.4% 第37位 定数30人 候補者69人）と票を激減させて落選してしまった。

しかし、1973年7月執行の選挙では、2,307票（得票率1.8% 第14位 定数44人 候補者78人）で二期目を勤めることになった。

だが、1977年7月執行の選挙では、2,200票（得票率1.5% 第38位 定数44人 候補者67人）と、当選3期目はやや勢いに陰りが見えはじめた。それは、伊平屋郷友会員の間で、「我々はいつも伊是名郷友会員に協力のし通しだ」という不満を募らせてきていることを反映した得票だったともいえる。

こうした経過の中で、伊平屋郷友会員の熱意を反映して、山川議員の後継者を自他ともに任じていた安里安明さんが、1981年7月執行の那覇市議会議員選挙に立候補できる環境が調った。

その選挙結果から見ていく。安里安明候補（保守系無所属国場系）は、2,470票（得票率1.7% 第24位 定数44人 候補者72人）で、伊是名・伊平屋出身者として過去最高の得票をした。4か月前の浦添市議選挙で燃え上がった郷友意識は、那覇市議選挙において一層たかまった。

安里議員は、前泊の郷友会＝虎頭会の会長を歴任してきたので、郷友会で信望が厚く、伊平屋村全体の郷友会＝村人会が結成されたとき、その事務局長を任されてきた。

だが安里事務局長が那覇市議に立候補することになったとき、その地位を下りた。それは次の理由のためだった。「実際に選挙運動をするのは、郷友会なのだが、組織自体としては建前として選挙運動をしないことになっている。だから私は事務局長を下りたのである。郷友会は、保守も革新も網羅した団体だから、どこの郷友会でも会則ではっきりと政治活動をしないことをうたっている。だが、個人的には政治活動は自由だから、郷友会組織とは別の形で選挙運動を、会員あげて行っている。」

〔選挙運動の実態〕

安里候補の選挙運動の形態は、郷友会サイドの場合、西銘議員の選挙運動の形態と似たような展開をしている。

親戚模合で日常的に結つきの深い親類縁者を中心に選挙運動の母体が形成され、それを核にして、郷友会員の中で後援会が結成されて、運動体の輪が広がっていった。

すでにみたように、母村の政党支持状況は、有権者の7割は保守支持であるから、共産党公認の西銘議員の場合とは異なって、ほとんどなんの足かせもなく、郷友会員はまとまって選挙運動をすることができた。

青年・婦人たちが挙って、ビラ張りや吹き出しに夜遅くまで奉仕した。また、多くの選挙カンパや運動員のための差入が、どんどん行われた。安里議員夫人は、「みんなが、自分のことのように選挙運動をしてくれたので、小さな郷友会からも当選させることができた。主人は、青年達の野球大会などにもこまめに顔を出して激励したりしている。普段から付き合いをちゃんとやっておけば、みんな選挙の時は動いてくれる」と語っている。

やはり、特筆すべきはこれまで自民党候補を応援してきたひとが、共産党公認候補を応援するといった形態がみられたが、逆に共産党支持者が保守の安里候補の選挙運動を一所懸命おこなったということである。その点もあとでみていくが、それは郷友会員が初めて「おらがムラの出身者」を異郷の地で選挙に立候補させたとき、理屈を越えて郷友意識が優先する傾向をここにおいても示されたのである。

5) 郷友会員の選挙運動の動機

郷友会員が各種選挙運動のときに表出する熱狂的エネルギーは、一体なにがその根源なのだろうか。それについては、各人各様の原因があるようである。

そもそも郷友会は、農山漁村から主として都市地域へ出稼ぎ・移住してきたひとたちが、異郷の地で相互扶助などを目的として結成したのであるが、それは相互扶助を必要とする状況の下に置かれていたことを意味している。郷友会員は、異郷の地に行政上の政策とは無関係に分村的居住地域を形成していったが、その過程では各人各様の辛酸をもなめてきている。一般に郷友会の母村の生活環境が、劣悪であればあるほど、かれらの組織的結束性は強く、その行動にはバイタリティーが溢れている。それは、いくつかの集落からなる島の郷友会をとって見ても、それぞれの集落の状況の違いによって各郷友会の組織活動の違いという面がみられるのである。明らかに、（具体的には、別稿で記述する）。

したがって、郷友会員の選挙運動におけるその行動契機は、各人（あるいは各郷友会）各様なのである。

まず儀間光男県議会議員は、次のように分析している。

「私は、30代に入ってから政治家になるつもりだった。だが、浦添在住の伊是名の郷友会員は、若いひとが多いので、儀間が浦添に移ったから彼を出馬させると那覇在住の郷友会の

先輩たちが話し合い、私は周囲から薦められ一年がかりで口説かれた。私が当選できたのは、郷友会のみなさんが小島から異郷の地に出て来て郷友党意識で暮らしており、そこでなんらかの政治的パワーが必要だと感じているところへ政治活動をした私が飛び込んできたので、周辺がワァーッと燃えた。」

そして、異郷の地で島出身者を議員として送り出すことが、郷友会員にとって大変な誇りであるという。その喜びを示すエピソードを、次のように紹介している。

「昭和55年に県議初当選のエピソードだが、伊是名島から本島へどなたかがお墓の引越があった。午前9時発の船に乗船しようとしていたが、一時間ほど出発が遅れた。するとその日県議選挙の開票の日で、ちょうど出発間際に私の当選確実が船内ラジオで報道されるやそのひとは、思わず骨壺を置いて万歳を叫んで、おどりだしたと言う。あんたは大変な人物だよと知らせてくれたひとがいて、その話を聞いたときとても感動した。というのは、島の風習では骨壺は絶対に置く物ではない。置く場合は、げたの上にしか置いてはいけないことになっている。」

〔郷友会員の選挙運動の動機〕

島の誇りというのは島人（しまんちゅ）意識＝郷友意識でもあり、それは理屈を越えたものである。

郷友会員は、郷友の候補者の選挙運動が盛り上がってくると、党派を越えてどうしても顔を見せないといけないという心境におおかれたのひとがなるといふ。また、運動員にはシマのひとの選挙運動で金を貰うなんてという風潮もある。島人意識については、西銘勉議員（共産党）が次のエピソードを語っている。

「去った（1984年6月執行）県議選挙では、私は本当にびっくりした。赤旗読者が自民党公認儀間候補の支持拡大をやっていた。やあ、何しているのと聞くと、これはいいところで会った。あんたも名前を書いてと、儀間候補の支持拡大をしていた。あんたはとたしなめると、今度は儀間候補が危ない、シマのひとが危ないと言うことで真剣になって当選させようと働いていた。全然金も貰わずその人はかれの世話にもなっていないのにその候補者のために頑張っていた。これは島人意識以外のなにものでもない。そういうことだから私も島人意識を発憤させ、同時に政策を訴えることをしていった。」

また、この島人意識は、次のような投票行動となってあらわれる。

「共産党公認候補への投票を依頼して、OKを取り付けてあっても選挙後確認してみるとシマのひとが立候補していたので、家族の票を分散させて一票は入れた」と、家族内の保守・革新への票割りを行うといった実態もある。

つまり、自分のシマから先人に立派な人物が輩出すれば、だれしものがそれに誇りを持つのと同じ考えで、経済界や政界にも自分の郷里から著名な人物が輩出することを望んでいる。

だが、単に島の誇り意識だけでなく、各人各様の思惑もあるという。儀間県議の後継者として浦添市会議員に立候補したことがある伊礼正二さんは、「建設業関係の事業家も多いので、議員を出せば人脈を通して仕事になんらかの便宜を計って貰えることを期待するひともいる。

また、就職を斡旋してくれるだろうという期待も大きい」ことを指摘している。その点については、多くの議員があきからにしているところである。特に就職の世話について儀間議員は次のようにその実績を誇っている。

「当選したあとは、身の上相談、就職の相談などいろいろなものが入ってくる。私はそれをきちんとこなしている。就職の世話は、8～9割はこなしている。相手が仕事の選り好みしなければ、100%世話できる。私は初の主席公選のときから全県を選挙運動してきているので、全県各地の企業の人事担当者をかなり知っているから、かなり押し込める。私は伊是名の郷友会員だけでなく、宮古の郷友会員のひと世話している。例えば、宮古の子弟が宮古で就職したいという場合、宮古に飛んで行って世話したりしている。」

このような日頃の付き合いが、次の選挙に影響してくる。

「こうして世話をするので、宮古から長男が出生した、誕生祝だという場合でも私を招待する。そうするとそこでたくさんの浦添の市民（宮古郷友会員）がいたりするわけです。浦添における選挙を浦添だけでやろうとするとすぐ底がつく、壁にぶつかる。それを突破するのは、市外（選挙区外）からの支援体制を作ることです。その支援体制をどれだけ作れたかが勝利の秘訣であり、勝敗を分ける。」

これは、沖縄の市町村単位の選挙でさえ選挙運動では沖縄全域におよぶといった状況を示していることを指摘している。

また、選挙運動して当選させた議員に結婚式の媒酌人・来賓挨拶などを依頼してその家の格付けをすることもその支持者の選挙運動の大きな見返りといえる。

6) 郷友会選出的議員の派閥の形成とその影響

郷友会員と各種選挙の関係は、次のように整理できる。

- ① 保守・革新の政党から立候補した人物をその出身地のひとたちが、同郷のものだからというだけで選挙運動する。
 - ② 郷友会員が、その郷友会選出的議員として政党とは関係なく立候補させる。
 - ③ 居住地域のひとたちが、出身地を問わずその地域代表として立候補させる動きに連動して、候補者と同じ郷友会員が選挙運動する。
 - ④ 候補者の妻（ないしは夫）が候補者と出身地を異にする場合、その妻（ないしは夫）の郷友会員も熱心に選挙運動する。こうして、候補者との郷友会員との関係が深まる。
- さて、以上のような関係で議員になっても、①の場合を除き、その多くは保守系無所属議員が大半である。だが、超党派的郷友会員の選挙運動で当選するためには、無所属から立候補したほうが良いと考える。

これまで保守自民党の政治派閥は、複数派閥のなかで田中派と福田派が最大派閥として「骨肉の争い」を続けてきたことは、周知の事実である。その派閥の抗争が、各県の国会議員・県会議員レベル・各市町村議員レベルにも波及しており、それは沖縄県においても田中派→西

銘派（現在沖縄県西銘順治知事）、福田派→国場派（国場幸昌衆議院議員）としてその勢力図が形成されている。

その派閥の形成は、郷友会選出的議員にも否応なしに波及してきており、選挙を重ねるごとに郷友会内部にも、その影響が現れてきている。そして、同じ郷友会から複数で立候補者が出た場合、選挙運動が郷友会の活動に影響を及ぼしかねないほど熾烈となる。

それを伊是名・伊平屋の郷友会内部で、どのように展開しているかを次にみていく。

浦添市で伊是名の郷友会員初の市会議員となった儀間光男議員は、現在沖縄県西銘知事の書生となって政治家を志望したわけだから、当然西銘派ということになる。しかし、1973年3月立候補した際は、無所属として当選した。

その前年6月執行の第1回県議会議員選挙では、浦添市選挙区は定数2人で、社大党(革新)と保守系無所属(国場派)の比嘉昇候補者(現在浦添市長)が当選した。

しかし、1976年6月執行の県議会選挙では定数が3人に増えた。そのとき、議員生活3年目の儀間市会議員も、任期一年を残して自民党公認で県会議員に立候補した。比嘉議員も自民党公認として立候補し、さらに保守系無所属、社会党、社大党、共産党の計6人が立候補した激戦区となった。儀間議員以外は、全員地元から立候補していた。

選挙結果は、比嘉昇自民党候補、社会党・社大党候補が当選した。ここで自民党公認候補の2人が、保守票を奪い合う形となり、西銘派と国場派の「代理戦争」的様相を呈した。また、郷友会員の内部には、儀間議員の県会議員への転出に批判的層も形成されたという。それは、次の浦添市議会議員選挙のとき、次のような形となって現れた。

〔二人目の伊是名出身議員の誕生〕

1977年3月執行の浦添市議会議員選挙に、前年県議会選挙で落選した儀間議員が再び郷友会員に薦められて無所属で立候補することになった。そのとき新しい動きが生まれた。それは、伊是名出身の大城永一郎さんの立候補である。

大城候補の父は名護出身で、実母は糸満出身だったが、父が伊是名で漁業を営んでいた。だが、実母が病没した後、父の後妻となった継母は伊是名村字伊是名の出身であり、本人も中学まで伊是名に住んでいたため、実質的な伊是名出身である。

1973年に儀間議員が初めて立候補したとき、国場派の那覇市会議員からかれに立候補の働きかけが行われていた。

それまで、郷友会の活動に参加したこともなく、だれかの選挙運動をしたことも無かったので、浦添市議会議員選挙への立候補の打診は、晴天の霹靂だった。当然強く固辞した。その議員は、「あなたみたいに苦労してきた人間だったら、みんなが快く推せるし、あなた以外に適当な人間はいないから」といって、3～4回も説得にきた。だが、「とんでもない」と強く断ったのである。

郷友会員が熱狂的に儀間候補の選挙運動しているときでも、友人と興したばかりの会社経営に熱中していた。友人がわざわざ選挙事務所に顔を見せろよと声をかけにくるが、そこでどん

なことをするのも知らなかったし、選挙運動に全く関心がなかった。

1976(昭和51)年11月ごろ、大城さんのところに彼の伊是名時代の友人が訪ねて来た。「来年(昭和52年)3月、浦添の市議選挙があるから立候補しなさいとけしかけて来た。私は相変わらず飛んでもないと断ったが、選挙運動は自分達に任せろ、儀間さんの選挙運動をしてきたからと言った。だが、儀間さんに対立することになるではないかと言ったが、選挙は運動員の問題だからとにかく決意しろと私に迫った。

そこで私もこれで2度目のことだし、男子がこんなに言われるのもひとに信頼があるからだろうと思うし、ひとにそのように言われる間は有り難いことだと考え、あんまり断るのは問題だから、それではちょっと考えさせてくれといった。

そこでまず妻に相談すると、それは離婚してからにして欲しいと剣もホロロに言われ、友人に相談しても、選挙のことは知らないし一人悩んでいた。現在600票ぐらいから当選するらしいということだが、自分にはそれだけの集票する力があるか自信はなかった。

伊祖の緑が丘団地に引越してきて間もないので、隣近所のひとたちも知らず、自治会がどこにあるかも知らなかったのも、まったく笑者にしかならなかった。大学時代の友人の叔父がその団地に住んでいたの彼にその話をすると、そういうのは地域の活動や事前運動を相当やって立候補するもんだと笑い、きみは議員になる柄ではないと言われた。

ところが、その地域に住む選挙通といわれている世話役が彼の生立ちなどを詳しく聞いていて、「あんたなら間違いないから地域代表として立候補すれば、私が後援会長になって良い」と申し出てきた。団地の幹部連中を全部良く知っているから、みんなに渡りをつけるということになった。こうして自治会のひとにどんどん紹介されていき、団地内でその名前が知られるようになった。

こうして立候補の根回しが進むと、周囲から選挙資金が必要だと言われた。「私はみんなが一所懸命やるということだったのに、なんで資金が要るんだ」と言うと、友人たちは「選挙には金が必要だ」といろいろ説明をした。」

地域から代表を出したいということで、立候補の話はトントン拍子に進んだが、選挙資金が百万単位で必要だと言われて、自宅を新築したばかりのうえに会社を興したところなので、とても立候補はできないと思い見合わせることにした。だから、もう12月に入るから浦添中に年賀状を出すように言われていたが、周囲は盛り上がっていくのに反比例して、本人はその気が無くなり、年賀状もついにしかなかった。ところが、「昭和52年の元旦にみんながやってきて、賑やかにしているとき私は立候補する気はないと言ったらみんなが怒りだした」ので、また思い直すことになった。そして、1月末にみんなが手弁当で応援するからと説得されて、出馬の意志を固めた。それにしても選挙資金が必要だと言われ、あっちこっちから借金して纏まった金を準備した。とはいってもそれだけでは選挙はできないと言われるような金額であった。

大城永一郎候補は、以上のような経緯で立候補することになった。

7) 派閥への関わりと郷友会員間の選挙対立

大城候補が最初立候補の決意をしたとき(1976年11月)、立候補を促したひとは出場するなら浦添選挙区選出の比嘉昇県議(国場派・現浦添市長)に挨拶しに行くことを勧めた。県議は、かれが自治会活動を始めなにもやっていないことを知ったが、どういう人物が支持者であるということを説明したら、それでは当選の可能性もあるだろうと答えた。国場派の県議に立候補の相談をして、その支持を受けることになったので、大城候補は以後国場系ということになった。実際、選挙戦に入ったら国場幸昌代議士が、色紙を持って、激励にも駆けつけて来た。

出馬することになったら、これまでの郷友会員の選挙運動を経験したひとたちが主体となった。しかしながら、これまで見てきた「郷友会ぐるみ」的選挙運動とは、様相が異なっていた。つまり、儀間光男議員が前年任期を残して浦添市議から県議に立候補したが落選したので、浦添市議へカムバックするために再度立候補した。それで伊是名出身が二人立候補することになった。

これまで、儀間議員の選挙では伊是名・伊平屋の郷友会員がほとんど一致団結した運動を展開してきたが、ここで否応なしに亀裂が生じることになった。とはいっても郷友会員の圧倒的多数は儀間候補を応援した。大城候補は、伊是名島で中学までの1～2年上・下の先輩・後輩は良く知っていても、郷友会との付き合いをこれまでやってきていなかった。それで、かれが立候補しても郷友会員はほとんど知らないし、親戚を中心にした郷友会員が、主な応援者だった。

実際の選挙戦に入ると、郷友会員間では二人を当選させようということではなく、「選挙は戦争であり、中傷・批判合戦で生易しいものではない」という。かれの大城姓は、名護出身であって、伊是名出身ではないと宣伝される材料になった。郷友会員の票をあてこむには、それは非常な痛手であった。それで、かれは方言の使用は名護言葉ではなく、伊是名言葉だけしか使えないことを証明するために運動員に連れられて挨拶回りをさせられた。選挙の結果は、儀間候補が960票で第3位、大城候補が638票を獲得して24位で伊是名出身者が二人当選をはたしたのである。

大城永一郎議員自身が、自分の支持母体は郷友会であり、得票の3分の2は郷友会員の票であると分析している。ということは、儀間議員が前回も3位当選を果たしているの、限られた郷友会員の票を双方が単に奪い合うだけでなく、凌ぎを削ることによって、郷友会員外の票を開拓していったということが言えるであろう。

8) 派閥対立の展開

派閥対立は、市町村長・議会議員選挙、県議会議員選挙、知事・国会議員選挙といった小・中・大選挙のそれぞれのレベルにおいて、離合集散を繰り返すといった複雑な政治力学が働くので、ここでは郷友会との関係にのみ限定して取り上げていきたい。

1980（昭和 55）年、浦添市民は中・大選挙のあたり年であった。6 月の県議会議員選挙・総選挙、11 月の市長選挙と 3 回も選挙が実施された。

11 月の市長選挙には、「保守回帰」の潮流のなかで長期にわたる革新市政（社大党）を保守が奪還する絶好の機会と捉え、比嘉昇県議（国場派）が立候補の態勢を調べていた。そして、県議会選挙には保守系市会議員間の内部調整の結果、儀間光男市会議員が立候補することで落着いた。1976（昭和 51）年の県議会議員選挙では、儀間（西銘派）・比嘉（国場派）候補が保守票の奪い合いの形を取ったが、儀間候補が不覚をとっていたので、ここで挽回したいところであった。

そして、市長選挙より先に執行される県議会議員選挙において、儀間候補を落選させたら比嘉市長の誕生も危ないというのが、保守陣営の分析だった。

そこで、1977（昭和 52）年の浦添市議会議員選挙では、伊是名・伊平屋郷友会員の票を儀間（西銘派）議員と奪い合う形になった大城永一郎（国場派）議員に対して、保守系市議団の中でも同じ郷友だから先頭に立って儀間候補を応援して欲しいと郷友会の長老たちを始めいろいろな角度から働きかけてきた。

特に郷友会サイドからは、伊是名という小さな島から県議まで送りだせるということはめったにないことだから、この機会を逃すなと強く要請された。そして、「次の浦添市議会議員選挙（1981 年 3 月）では、伊是名・伊平屋の郷友会をまとめてトップ当選させるから、県議会選挙には協力してくれ」と説得されたという。まだ、派閥意識がそれほど無かった大城議員も、同じ郷友会内から県議を確保できることはこんな良いことはないということで、協力を約束して儀間候補の選挙運動を推進していった。

選挙結果は、定数 3 人に候補者 4 人という少数激戦の中で、儀間光男候補（自民党公認）は 10,125 票（得票率 32.1%）という他を寄せつけない圧倒的得票でトップ当選をはたした。そのあおりで、現職の社会党議員が落選して保守・革新の勢力図をぬりかえられたのである。伊是名・伊平屋の郷友会員は、沖縄本島で島出身者を県議に当選させて非常に意気があがり、どれほど驚喜したひとがいたかについて、すでにそのエピソードは紹介した。

〔郷友会員間の派閥対立の激化〕

1981 年 3 月執行の市議会議員選挙に向けて、立候補の顔ぶれはその前年 11 月ごろにはほぼ出揃う。ここで、伊是名・伊平屋の郷友会員の中から出てきた立候補の噂は、意外な名前が出てきた。大城現議員以外に、伊平屋出身の西銘勉（共産党公認）・伊是名出身の伊礼正二氏である。西銘勉氏については、すでに詳述してきた。

大城議員は、郷友会との関わりが議員になるまではまったく無かったという異色の人物だったが、あらたに伊是名出身の立候補の噂となった伊礼正二さんは、郷友会の会長を務めてきたので、郷友会員間では知名度が高かった。

伊是名の各部落郷友会が結成されたあと、諸見の郷友会も結成されたがその活動はほとんど停滞していた。そこで、伊礼正二さんや教員グループを中心に再出発して、活動が展開した。

公務員だった伊礼さんは永年郷友会長を務めることになったので、伊是名全体の郷友会員との付き合いも増えた。そして、特に政治への関心が強かったわけでもないが、人柄を買われて立候補を説得されたのである。

国会議員レベルの派閥の勢力は、各市町村単位の議会議員の数をいかに多く獲得していくかによって、その力の集積を計っていく。それは、市町村・県議会議員レベルの思惑を越えた大きな派閥次元の力が作用していくのである。

大城議員は、伊是名の郷友会員の多くに支援されて出馬することになった伊礼正二候補の出現に、そのような派閥次元の力を感じたに相違ない。

こうなると郷友会の長老たちも「お互い競争して、二人とも当選できるように頑張らなさい」としかいいようがない。そこで、郷友会員同士はもはや選挙区以外からも郷友会員の運動員を動員してきて、凌ぎを削ることになり、「関が原の戦いみたいな戦場」だったと表現する選挙戦が展開した。その選挙戦では、さまざまな人間関係における摩擦も発生して、大城議員は「私は本当に政治に関心はなかったが、今度の選挙のときは運動員ともども非常に燃えて、お互い意地からでも絶対当選してみせるといきりたった」という。

郷友会員間で、票の奪い合いの形になる選挙戦では、郷友会員の票は限界があるので、会員外の友人・知人、姻戚関係、職場関係、仕事上の取引相手などあらゆる人脈をとおして、あらたな票の堀起こしを図っていく。もはや郷友会は単なる票田ではなく、その郷友会員は、選挙運動母体とならないと共倒れになるのである。

儀間議員の選挙運動員に支えられ、儀間議員の後継者といわれた伊礼正二候補は、母村の村議会議員3名も駆けつけて応援するほど盛り上がり、伊礼候補は絶対大丈夫、大城候補は危ないという情勢分析だった。郷友会選出の議員は、党派を明確にしないことが得策なので、ほとんど無所属で立候補するのが通例である。そこで、大城候補はそれを逆手にとって「ただ一人の自民党公認の大城」と宣伝カーで流したので、浦添市に県外出身者が多数住んでいるから、浮動票としての自民党支持票を集票できた。

そこで、選挙結果は大城候補が821票・23位で当選して、伊礼候補は703票・33位、32票差で落選した。その落選は、前述の伊平屋出身西銘候補が1,089票でトップ当選したあおりを受けたと分析している。保守陣営にとって、共産党公認候補者が、共産党の基礎票に郷友会員の票の押し上げでトップ当選を果たしたということはショックであった。

9) 郷友会と選挙—今後の動向

少なくとも浦添市では、県議会議員選挙・市長選挙にしても宮古・伊是名・伊平屋の郷友会員を抜きにして、選挙は出来ない、特に宮古の場合人数も多いし、情熱的・徹底的にやるので宮古抜きには選挙が出来ないと言われている。

郷友会員は選挙をたびたび経験することによって、郷友会の中で保守・革新の色分けが次第に行われていく傾向もある。それは、保守支持層の間で派閥の色分けが次第に行われていくの

と同じ傾向である。

したがって、伊是名の郷友会員では、その点だいぶ明確になって来ている。かれらは、伊平屋出身の西銘共産党議員がトップ当選になったのは、伊平屋郷友会員にとって初の経験だから、「一致団結」したのであり、あとは伊是名の郷友会みたいになるはずだと判断している。

つまり、保守・革新の対立の構図と保守内の派閥間対立の構図との関係から、1985（昭和60）年3月執行の浦添市議会議員選挙では、伊是名郷友会員間で西銘派と国場派が対立する形を避けて、保守の側は伊平屋出身者を立候補させるであろうと推測されている。しかも、派閥の勢力図から考えると、それは西銘派でなければいけない。そうなると伊平屋の郷友会員間でこれまでの党派を越えた「郷友会ぐるみ」的投票行動はもはや再現することはないはずである。すなわち、地縁・血縁を重視した投票行動と政策重視の投票行動とに両極分解して、郷友会員の保守票と革新票といった様相を呈するようになりそうである。（1985・1・17 脱稿）

追記

本稿の校正段階で、1985年3月3日執行の浦添市議会議員選挙の開票結果が、発表された。本稿にかかわる伊是名、伊平屋出身の立候補者の得票結果は、次のとおりである。

西銘勉候補（共産党・伊平屋出身）・1,376票（得票率3.5%第10位）、大見謝幸一候補（新人・保守系無所属西銘派・伊平屋出身）・967票（得票率2.5%第23位）、大城永一郎候補（自民党・国場派・伊是名出身）・937票（得票率2.4%第24位）で三人が全員当選を果たした。

定数30人に対して35人の立候補という少数激戦となった選挙戦は、熾烈をきわめた。伊是名、伊平屋の郷友会員がどのような形で選挙運動をしたかについては別稿で詳述する。

伊是名(勢理客)・伊平屋(島尻)出身の沖縄本島在居住地域

単位記号：● 伊是名村勢理客出身の一所帯数 1976年7月現在

◇ 伊平屋村字島尻出身の一所帯数 1975年7月現在

那覇・浦添市外の居住地域

国頭● 大宜味● 本部町● 名護●

読谷●●●●● 石川● 嘉手納●●●●●

沖縄市●●●●● 具志川●●●●●

北谷●●●●●

宜野湾●●●●●◇◇◇◇◇ 北中城●

西原町●●●●● 南風原● 東風平●●

豊見城●●●◇◇◇◇ 不明◇◇

